

医事・文談 九百六十二 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その250
子規と漱石(五十九たび続)

より江は、病氣と火災という、二重の責苦に遭つた後、昭和16年5月11日死去した。数え年58歳。秦の『漱石文学のモデルたち』によると、漱石は松山から熊本への赴任に際しより江に次の句を与えたという。

わかるるや一鳥啼なに雲に入る

しかしこの句は、全集の俳句の部を見ても、見当らない。小生のさがし方が悪いのかもしれない。それよりも、明治28年、正岡子規に送った句稿(十一月二十二日)の左の言葉書きのある句は、正しくより江を写したものである。

旅宿の女十三歳時々発句を云ひ出づ 一句
女の子発句を習ふ小春哉

しかもこの子は子規も見知っている、より江である。子規はより江の顔を思い出して、覚えぬ笑をもらしたであろう。それにしても、十二、三歳で大人の句会に列して、俳句をよんだというのであるから、幼にして才女であったというべきであろう。

秦氏の『漱石文学のモデルたち』によって、今まで記述したこと訂正と補遺をすることとする。

漱石が松山中学の英語教師として赴任したのは、明治28年4月。人力車で乗り付けた山城屋旅館(実際は城戸屋)では待遇が芳しくなかった。で、茶代を奮発したら、二階十五畳、次の間付きの最上等に移されたが、宿賃がかさむので、同僚の世話で、骨董商「いか銀」または「津田安」の津田安五郎方に下宿した。しかし主人が、いかさま物を売り付けようとするのと、蚊の大群が押し寄せるのに閉口してまたまた居を移すこととなった。

今度の紹介者は、同じく同僚の中堀貞五郎(今治)の出身で、子規の妹の律と結婚したが、一年ばかりで離婚したというから、漱石と子規両者の関

係者である)で、それが見つけてくれたのが漱石が愚陀仏庵と号した上野家の離れである。主人の上野義方は、二百石取りの旧松山藩士で、当時は土地の豪商米九(越智九平)の家令をしていたという。

その時の上野家の家族は、主人の70歳近い義方と、タダという老妻、それに三十代の出戻りの長女と、その娘で15歳くらいのキミが母家に住んでいた。本稿九百四十六に、「漱石、子規の世話から、祖父母、それにより江さんの面倒を見たのは伯母で、女中相手にかいがいしく立働いていた」という伯母というのが、長女ということになる。

より江の母は、上野家の次女で、夫の宮本正良(市之川鉦山の技師)と西条近くの鉦山町に住んでいて、より江は転校を嫌って松山の祖父母と暮らしていたのである。

より江の父が勤めていた鉦山を別子鉦山だろうと書いたが、これは誤りで市之川鉦山はアンチモニーの世界の鉦山で、明治二十年代から大正初期には鉦員二千名余を擁する規模であったという。

より江は学校がかわり、友人と別れるのが嫌で、父の任地の市之川へは行かず、祖父母と同居していたが、夏休みには父母の許へ帰っていたのである。

夏休みが明けて、松山へ戻ってみると、離れの一階に居た漱石は二階に移り、一階には子規が居を占めていたという。子規は8月27日に上野方へ来たのである。子規は昼には、蒲焼を取り寄せてびちゃびちゃと音を立てて食べた。

それから10月16日帰京のため松山を離れるまで連日のように、松山の俳人が集り句会を開いた。この連座に、より江が同席して、句を習っていたというから、怖るべき子供であったというべきである。色が浅黒くて、印度美人の称があったという。

上京して府立東京第二高女を卒業したとしたのも誤りで、中退して久保猪之吉と結婚したのである。福岡社交界の三羽鳥と謳われた才女も、晩年は中風を病み、可愛がっていた愛猫の過失で自宅が全焼するなど幸福でなかったのは傷ましい。

専門部から

平成16年度日医認定健康スポーツ医制度再研修会開催一覧 (道内開催分のみ)

◇産業保健部◇

主催者名	開催日時	開催場所	主な演題および講師	単位数	連絡先	備考
旭川市医師会	平成17年 3月11日(金) 18:00~ 20:00	旭川市医師会館 旭川市金星町1丁目	アンチドーピングのために ~国体選手へのサポート~ 北海道大学病院薬剤部医薬 品情報室 室長 笠師久美子	1	旭川市医師会 0166-23-5728	